

第一次大戦を抜けた欧州で知識人たちの関心を煽ったのは、没落の感覚と危機の意識だった。1919年以後、ポール・ヴァレリーは『精神の危機』で、こう問うていた。はたして欧州はその優位をあらゆる分野で維持できるのか。言い換えるなら、欧州はその現実の姿、つまり亜細亜大陸の岬に過ぎぬ存在となるのか。それとも欧州は、この地上界の優れた部分、惑星の球面に輝く真珠、巨大な身体の頭脳という「現し」の位置に留まりうるのか、と。「現し」と仮に訳した paraître には、西欧側の主観的意識の現われ、という意味が込められているだろう。そこに立ち現れるのは、はたして自負か、自惚れか、それとも幻想、あるいは幻滅なのか。

こうした自己懐疑と裏腹に、アジアそして東洋なる存在が視野に入ってくる。1913年にラビンドラナート・タゴールがノーベル文学賞を受けるや、アンドレ・ジイドが作品をフランス語に訳し、ロマン・ロランに接近する。ロランはといえば、ラマクリシュナ、ヴィヴェカーナンダそれにガンジーに関する著作によって、東方への開眼を果たす。岡倉天心の『東洋の理想』と『日本の覚醒』が合冊で、フランス大使の序文を付して公刊されたのが1917年。その前年の1916年に『アジアの賢人と詩人』を公刊していたポール＝ルイ・クーシューは、その序文で「アジアはひとつ」である、と復唱し、「インドの繊細さと情熱、中国の理性、日本の意志、それらすべてが最強度に結びつかないなら、日本の真の傑作を生み出すことはできまい」、と岡倉の『東洋の理想』の骨子を――著者の名前には直接には触れずに――援用していた（邦訳『明治日本の詩と戦争』金子美都子・柴田依子訳、みすず書房1999）。やがてこの岡倉の史観は、アンリ・フォションの『北斎』第2版序文（1925）にも引かれ、ソルボンヌ大学美術史教授はそこに「おそらくは架空だが、[アジア]の神髄をなす géniale 構造」

運載
一「東方の脅威」と「東方の知恵」とのあいだ
両大戦間の東西優劣論

国際日本文化研究センター研究員
総合研究大学院大学助教
稲賀繁美

を見て取ることになる。

在日フランス大使を務めたポール・クローデルの『東方の知』Connaissance de l'Orientは、語源に溯れば、東洋と共に生まれる、との意味を含み、詩人の世界認識の哲学を示唆する。その著作にも影響されてか『光は東方より来るのか?』と題する論争が『月々の手帳』Cahier du mois 9/10号（1925年2-3月）に見える。ここで「もはや欧州だけでは不十分で、アジアに目を向ける」姿勢をとるロランにたいして、『アクション・フランセーズ』の協力者だったアンリ・マシスは「論点を鮮明にする」と称して、こう発言する。「タゴールやオカクラやクーマラスワミ[天心の没後ポストン美術館に勤務したインド美術史の権威]といった輩、それにガンジーその人」は、しょせん「欧化した東洋人」、すなわち「偽東洋人」にすぎない。そこに現れた思想は、ほかならぬ欧州の思想の最悪のネガに過ぎぬ、と。東方の脅威は現実だが、それは西側世界自身の失策に帰着する、と。

他方マシスは、「東方への回帰」を訴えるヘルマン・フォン・ケイゼリク、ヘルマン・ハッセ、ロマン・ロランらは「偽オリエンタリズム」の徒と弾劾する。こうした「アジア宣伝係」は、「東洋」が「西方世界を再生させる」ものと説くが、そこから脅されるのは、「我々を墮落させ、我々を自滅させる危険を孕む、ありとある教説や異端」だ、と攻撃する。「シュベングラー流の汚染は、ドイツの失望の一形態」であり、「東方とドイツとも結び付けるのは、〈ひとつにして全体〉というあの哲学」であり、「アジア主義とは、かつてのドイツ主義同様、野蛮人たちからの訴えにあらざるや」との懸念が表明される。

『西方と東方』（1924）の著者ルネ・ケノンはこちらの論調に対抗して、「真の東洋思想」、「本当の東洋の影響」を言い立てる。マシス流の「東方の脅威」は短絡であり、ドイツ人やロシア人は純粋な西洋人だ

が、かれらはアングロサクソン同様、東洋思想の理解に適さない。最適なのが、「ラテン人種」であり、「真の形而上学の不在」や「知性の欠損」という「自らの欠陥」に由来する現下の「脅威」に対抗するには、「中世の伝統」への回帰が肝要だ。「東方の知恵」はそこで我らに利する。それは、西方を変質させるのではなく、むしろ「我らの内なるキリスト教神秘主義を覚醒させ」、もって地中海文明の本来の姿への復帰を手助けするものだ、と。

厳格なカトリックとして、イスラーム神秘主義に「覚醒」したアンリ・マシニョンや、エドワード・サイードが再評価した『ルネッサンス・オリエンタル』のレーモン・シュワープを彷彿とさせる「東方」観だが、その延長線上に第三の立場として、文学史家ルネ・ラルを位置付けよう。ラルによれば、「我らが文学的再生には外国からの影響の伴うことが」歴史的にみて必須であり、「フランス精神の神髄はその調和の交響曲の構成要素を宇下全体から借り受け」、「その度に世界を統合する」ことによって自らを豊かにしてきたのだ、と。

いかにもフランス植民地主義の高揚期に相応しい「統合」intégrationの思想だが、これらは果たして過去の遺物に過ぎないのか。「統合」とはドイツでは大統領が移民受け入れ促進のため、今日なお國是として国民に訴える理念であり、またサミュエル・P・ハンチントン『文明の衝突』の説は、両大戦間の欧州で闘わされた議論の土壌から、ほとんど一歩も出てはいない。コレージュ・ド・フランスのインド学担当者だった、シルヴィアン・レヴィは、東西の思想的優劣を巡る論議に熱中する風潮に警告を発して、こう問うている。「監査役を監査するのは、誰なのか」と。(Bernard Hue "Le Dialogue Orient-Occident entre les deux guerres," in Dialogues des Cultures, Peter Lang, Bern, 2000, p. 35-42に負うところが多い。記して謝す。)

思想の景

思想